ヴィーナスのえくぼ

Dimple of Venus

加賀乙彦

Kaga Otohiko

ヴィーナスのえくぼ

加賀乙彦

中央公論社

ヴィーナスのえくぼ

一九八九年一〇月一〇日初版印刷
一九八九年一〇月二〇日初版発行

著　者　加賀乙彦
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
製本所　大口製本
発行所　中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
検印廃止
ISBN4-12-001873-3

©1989 Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.
Otohiko Kaga

目次

第一章　同窓会　5
第二章　恋人　85
第三章　樹氷　193
第四章　失踪　239
第五章　事故　287
第六章　白い鳥　323

装画　野田弘志

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ヴィーナスのえくぼ

第一章　同窓会

眠れない。脳の細胞を雲のように包んでいた睡気がどこかに飛んで行ってしまい、キーンと張り詰めた青空のような意識がひろがっている。

悦夫はイビキをかいていた。咽喉の奥底からマグマのように噴きあげてくる息が鼻を共鳴させて、濁った空気を散らす。そのたびにアルコールの臭気が、ことさらな生ぐささで迫ってきた。アルコールだけではない。反吐の臭いが混っている。寝室の空気がすっかり汚染されてしまった。奈々子は悪臭をすこしでものがそうと窓を開けた。

ビルの谷間に夜は黒い水となって溜っていた。遠くの高層ビルの赤い点滅灯が心臓のように生々しく鼓動している。枕元のスタンドを〝弱〟につけると悦夫の体が水底から浮きあがった土左衛門さながら盛りあがった。

禿げあがった額と二重顎の下の短い首、開いた口から光る金歯、よく五十代に間違われるが、彼はまだ三十九歳だった。三十三で渡米したころから禿げ始め、まるで空気を注入したように肥りだした。そしてイビキをかくようになった。結婚したときは、学生時代にラグビーの選手だったとかで、筋肉質の硬く締った体形だったのが、別人のようにぶくぶくとした男になってしまった。運動不足と飲酒が原因なのは本人も自覚していた。が平日は毎日十一時前後の帰宅で暇がなく、週末は

疲れて運動どころではなかった。そして、毎夜、どこで飲むのか酔って帰ってくる。時には今夜のように泥酔して、午前様となる。去年、会社の定期検診で肝臓障害を指摘され禁酒をすすめられたが、その後も全く反省の気配はない。それどころか深酒が多く、吐くほどの悪酔が増えてきた。

さっきはひどかった。玄関のドアが轟音をたてたので飛び出してみると、悦夫が濡れ鼠で立っていた。雨も降っていないのにどうしたのかと驚き怪しむうち、上着もズボンもべったりの反吐にまみれ、それを、多分このマンションの洗車場の水道で洗おうとしたらしいと分った。

「あらあら大変」

「何が大変だ。大変じゃねえぞ」悦夫は弥次郎兵衛のように揺れつつ、千鳥足で廊下を歩いた。

「下にひびく。静かにしてよ」

「何を。自分のうちで歩くのが何が悪い」

「悪いわよ。このまえだって文句言われたじゃない」

「文句……そんなヤツは言わせておけばいい」悦夫は、一層ドカドカ床を蹴りながらバスルームへ行き衣服をかなぐり捨て、シャワーを使った。

こういうところが実に不思議なのだが、悦夫はどんなに酔い痴れてもシャワーを浴び、歯をみがき、パジャマに着替えるのだった。長年の習慣は体の芯にまで染みついていて、泥酔ぐらいでは抜けないらしい。

ベッドに入ると、いつもはすぐ高イビキで寝入ってしまうのが、さっきは違った。

「おい、奈々子、おいで」と呼んだ。彼女は動かなかった。酔っているだけならいいが今夜は吐いている。胃液や胆汁の臭いに加えてアルコールの臭いが強烈だ——焼酎、日本酒、ビール、バーボ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ン、スコッチ、それから……ステーキだろう、このニンニクの臭い。奈々子は鼻が異常にきくのだ。電車の中で前に立った人が昼飯に何を食べたのかまで分ってしまうくらいだ。

「おいで」と呼ぶ声に、絞るような怒気がこもってきた。奈々子のベッドに来て、毛布を剝ぎ、覆い被さってきた。「いや」と奈々子は逃げ、その拍子に悦夫の西瓜腹を押して引っくり返した。

「何だっていうんだ。女房のくせに夫を拒否するのか」

「するわよ、酔ってるんだもの」

「酔って悪いか」

「悪い、泥酔だ、滅茶苦茶だ」

「畜生め」悦夫はよろよろと追ってきた。廊下を、もう遠慮会釈もなく、ドカドカと走る。奈々子は、息子の達夫の部屋に逃げこみ、ボタンを押してノブをロックした。二度、三度、ノブを回そうとして、ドアを叩き始めた。達夫が目をさました。

「ママ、こわい」

「大丈夫よ。パパなんだから」

「おい、あけろ」仕方なくロックをはずすと悦夫は猛犬のように飛びかかり、奈々子を平手打ちした。

「やめて、子供の前なんだから」

「この野郎」と悦夫は、拳で奈々子の胸を突いた。悲鳴をあげて逃げ回る母親に、息子が泣きながらむしゃぶりついた。悦夫は本箱から本を取って投げ始めた。教科書や参考書が散り、花瓶が割れた。ともかくやめさせなくては……と奈々子は必死で夫の手をおさえ、廊下に逃げた。追ってくる。

また逃げる。キチンへ逃げこんだら食器をこわされると思い、腕を掻い潜ってトイレに入りこんだ。しばらくノブを動かしたすえ、あきらめて行ってしまった。そっと出てみると、悦夫は寝室にもどり、きちんと毛布を掛けて、何ごともないように眠っていた。

達夫の部屋で散らばった本を本箱に収め、花瓶の細片を掃除機で吸い、なおも泣きじゃくる子供をやっと寝かしつけ、汚れた背広をバスタブに漬けてすすぎ、やっと落ち着いてベッドに入ったが、さあ寝付けない。キーンと張り詰めた青空のような意識のなかで横になっているのみであった。叩かれた頬が火照(ほて)っている。痛みはなくなったが火照りは消えない。そして突かれた胸の骨に鈍痛があった。泣きたい気持だ。が、奈々子は自分が加害者の前では泣きはしないと知っていた。幼いとき父親にこっぴどく叱られても泣きはしなかった。泣いてあやまれば許されると知っていても、いやそれだからこそ泣きはしなかった。彼女には叱られる理由が分らなかった。さっきの悦夫が怒る理由が分らなかったと同じように。

悦夫は正体もなく眠っている。しかし、密林の奥で獅子が自分より弱い動物を脅かすような、ラグビーのひいきチームが勝ったときの歓声のような、傍若無人の騒音を撒き散らしている。肉体の深みからわきおこった空気は鼻柱の根元で凝縮すると、ラッパ形の鼻孔で一気に拡大して放出され、おぞましいファンファーレとなる。

奈々子はヘッドホンで音楽を聴きだした。いま先生に習っているブラームスのヘ短調ピアノ・ソナタだ。この方法は成功しないと彼女は知っていた。騒音を音楽で消すには彼女の耳は鋭敏に過ぎるのだった。子供のときからピアノを弾いていて、絶対音感ができている彼女の聴覚は、どんな小さな音も聞きのがさない。ピアノの音をイビキが邪魔し、イビキとピアノが重なり、遠くのかすか

な救急車の警笛から近くの車のエンジン音までの、あらゆる音が同時に聞え、聞き分けられて音楽は無意味な音、聴覚を刺戟する雑音の一つに成り下がるのだった。いつだったか、テレビの教養番組で不眠症の人は、物を考えるより、つまり内部に心を向けるより外の音へ意識を向けたらいいと精神科医が言っていたが、この精神科医はきっと音に鈍感な耳しか持たなかったに違いない。ともかく、ソナタの第五楽章まで聞きおわっても睡気はおこってこなかった。失敗である。頭のなかに数多くの音が反響し、複雑怪奇なヤマビコとなって繰り返し、頭が破裂しそうだった。

奈々子は文庫本を読み始めた。二週間ほど前から暇があると読んでいる『紅楼夢』だった。長い小説を長い間かかって読むのが好きで、この長大な小説も、ためしに手に取ってみたら、たちまち世界に引きいれられてやめられなくなった。むろん、マンションに幽閉されたおのれの生活と金陵の大邸宅に住む大金持の一家の物語とはかけはなれすぎているが、若い人たちの優雅な毎日は、夢幻の境をさまようような快感を呼び起してくれた。ことにも主人公の宝玉と恋人の黛玉とがおたがいに心ひかれながらも、行き違い傷つけあう心理の綾の素晴しさ、会話の妙には感心する。ところが『紅楼夢』を読んでいると悦夫に言ったら言下に莫迦にされた。「何がいいんだい、そんなの」「面白いの」「小説なんかつまらねえ。嘘っ八を並べるだけじゃねえか」

悦夫は小説を読まない。クラシック音楽にも関心がない。『紅楼夢』もブラームスも彼にとっては何の意味もない世界だ。「おれの青春はラグビーだ」と言うのが口癖で、学生時代にラグビーのウィングで鳴らしオーストラリアに遠征した思い出を、飽きもせずに反復している。結婚披露宴にもラグビー部の友人が大勢出て校歌と応援歌を唱い、肩を組み合って、奈々子には野蛮としか思えぬ奇声を発していた。結婚したてで、郊外の社宅にいたときは、近所のラグビークラブに入って日曜

ごとに練習に励み、泥だらけになって帰宅し、体も硬い筋肉質を保っていた。しかし、ニューヨーク駐在員となってからは全くラグビーから遠ざかってしまった。そのためか、肥りだし、医者からは運動をすすめられたが暇がないという理由で何も始めず、日本に帰ってからは正月に三、四日スキーにいくのが唯一の運動となった。

夜が白みそめたとき、やっとのことで睡気がおそってきた。霧のような淡いものだが、せっかく発生した睡気だから、のがさぬようそっと文庫本を置いてスタンドを消した。目覚しのラジオに起されたのは六時だった。二時間しか眠っていないので疲れが全身の筋肉を汚水のように漬している。睡気は固い鉄の塊となって頭のどこかに隠れてしまった。

まず達夫を起さねばならぬ。これが容易ではない。寝起きの悪い子なのだ。部屋にそなえた目覚し時計はドイツ製で三段階に不快な警報音をたてるのだが、まったく無効だ。むしろその音で目覚めてしまうのは奈々子のほうだった。「達っちゃん、おきなさい。学校におくれるよ」と毛布を剝ぐ。ちぢかまっている小さな子、小学校三年生のくせに一年生ぐらいに見られる。学校でいじめられ、時々、脛や太股に青い皮下出血を作ってくる。父親と違って色白のひ弱な子だ。目をこすりながら、やっと上半身を起してきた。

昨夜洗った皿を戸棚にしまい、コーヒー、オートミール、コーンフレークの朝食を用意して、洗濯物を自動洗濯機に投げこみ、ふと気がつくと達夫はまだ起きてこなかった。六時半だ。渋谷にある私立大学付属小学校は八時二十五分に始まる。七時に送り出さないと間に合わない。

三度目にやっと起きてきたときは七時十分前だった。制服を着て歯をみがく時間しかない。達夫は洗面所で悲鳴をあげた。

「ママ、大変だよ。お風呂がゲロだらけだよ」
「何でもないの、パパがちょっと吐いただけ」
浴槽に水死体の形で背広が沈み、脂や野菜が浮いている。ざっと水洗いしたつもりが、懐やポケットに流れこんでいた汚物が浮き出したらしい。鼻を突く汚臭である。奈々子はゴム手袋をはめて手洗いにかかった。
達夫は何も食べず出て行こうとする。
「だめよ、何か食べなくちゃ。また気持が悪くなるから」家庭訪問で担任から注意された。「花房君は授業中、しょっ中貧血をおこします、朝食をしっかり食べさせて下さい」
「もう行かなくちゃ」
「早く寝ないからよ。きのうは十二時すぎまで寝なかったね。だから朝起きられないの」
「パパのせいだ」と達夫は叫んだ。「夜おそく騒ぐんだもの。あれじゃ眠れやしないよ」
「パパは、夜おそくまで仕事なのよ」
達夫は背広と汚物を睨んだ。それから大きなアクビをしながら出て行った、父親の真似をして鋼鉄のドアを力一杯叩きつけて。奈々子は溜息をついて、また背広との格闘にかかった。
達夫が出ていくと悦夫が動きだした。これが毎朝そうなのだ。もう三十分早く目覚めて息子と一緒に食事をとるという気持にはならないらしい。丸の内のM貿易会社は九時半に始まるから、八時に家を出る必要があり、そのためには七時に、つまり、達夫が出た直後に起きればよいという計算があるだけだ。そして、朝の時間の正確さは彼にとって習い性となっていて、前夜どんなに遅く帰っても、きちんと七時にベッドを離れるのである。洗面所に来て、奈々子の洗濯を横目に見つつ電

気剃刀をつかいだした。右手を動かしながら左手で突き出た腹を掻く。いかにも痒そうに掻く。毎朝きまった動作である。
「どうしたんだ、その背広」
「どうしたと思う」
「おれのだな」
「もちろん」
「きのう着ていったやつだ……何かあった……」
「あなた、きのう、どうやって帰ってきた」
「覚えてない。会社の連中と銀座で飲んで、途中から記憶がない」
「タクシーに乗ったんでしょう」
「たぶん……もう終電はなかったから」
「途中で何がおこったか。うちに帰って何をしたか」
「全然覚えてない」
「困った人ね」奈々子は、スカートをかかげると浴槽の中に右脚を踏み入れ、背広を踏みだした。
「ひどかったの。あなた、吐いてベトベトで、達夫の部屋で大あばれ、教科書を投げとばして花瓶を割って……」
「もういいよ、分った」
「分ってない。このごろ、ひどいわよ。飲みすぎよ」奈々子は両脚で背広を踏みつけた。
「付き合いだ。仕方がない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.